令和６年度第３回みやぎ観光振興会議仙台圏域会議　委員等発言要旨

日時：令和６年 10 月 31 日（木）午前 10 時から
場所：宮城県仙台合同庁舎　10 階会議室

～議事１について事務局（観光戦略課　松本担当課長）より説明～

早坂　委員

〇第６期中間案の観光戦略プロジェクトの戦略②（３）「新たな旅のスタイルへの対応強化」について、自分は農業経営をしながら観光分野に取り組んでいるものの、農業分野の施策と観光分野の施策の方向性が合わない場合もある。全体で取り組むということであれば、横の連絡連携を密にしていただき、どうすれば実現できるのかを検討していただきたい。

〇観光資源の掘り起こし整備等をやった上でということになると思うが、バスのような二次交通の整備を期待する。

〇どこの市町村でもあった神楽という伝統芸能が高齢化等ですっかり廃れている現状。和太鼓も各市町村にある。日本の伝統文化・芸能のそれぞれの特徴をいかすことで、インバウンドに向けた有効な観光資源になると思うので、ご支援・ご協力をお願いしたい。

事務局（松本担当課長）

〇県庁も組織が大きく、横の連携もしっかりとやっていかなくてはいけないと考えている。関係各課ともしっかりとプランを共有しながら取り組んでいきたい。

〇周遊促進の二次交通をどのように充実していくかという意見についても、宿泊税の導入の議論時に、色々と議論になったところであるが、やはり地域交通との兼ね合いなどもあるので、県としても、どのような形で対応できるか、今後、このプラン期間も含めて考えていきたい。

〇インバウンドの方が伝統文化や工芸品などに興味を示しているとの意見については、地域の伝統の維持やなり手不足など様々な課題もあるかと思う。県としても、プラン案の取組の方向性の戦略１に掲げている「魅力ある観光資源の創出」にて、しっかりと取り組んでいきたい。また、その中で市町村に対しての財政的な交付金などを含めた支援なども考えながら、市町村の方々とも一体となって取り組んでまいりたい。

東海林委員

〇宿泊者数の回復状況について、なかなか実感が得られない。この中間案は、とても良い案がたくさん出ているが、戦略１「県内の隅々まで訪れる観光客が訪れる観光地を目指す」というものについて、仙台圏内での特定のエリアだけが盛り上るのではないかと感じている。この計画に対する評価について、圏域より細かい市町村ごとの結果を知りたい。

事務局（松本担当課長）

〇仙台圏の中でも、各市町村ではどうなのかということも、今後、こういった場でしっかりと皆さんの方にもお伝えしながら、そこからまた議論が深まるように取り組んでいきたい。

島谷委員

〇観光戦略プロジェクトの戦略②「観光産業の活性化」は大事な部分であるので、もう少し厚みがある内容になると良いと思う。観光を力強く進めていくためには観光産業の

活性化は大事なポイントである。改めて地域住民に観光および観光産業についての理解促進を図ることは人材不足対策にも有効なことと考える。

〇第５期プランの推進により課題を抽出し第６期に展開していると思うが、中間案は、宮城県らしさが伝わりにくい内容と感じる。宮城県はどういう地域でどういうことをしていくのかということを強く打ち出すことで、観光事業者のみならず県民にももっと分かりやすい内容になるのではないか。

〇この案についてなるほどと思うところも多々あるが、総花的にも感じる。宮城の観光、宮城らしさは何なのかというところを改めて明確にし、前面に打ち出すと良いのではないかと思う。

事務局（松本担当課長）

〇今回、「オールラウンド」というキャッチフレーズには、「関係者全員参加型の観光地域づくり」という意味が込められている。これは人口減少が進んでいく世の中において、多様な主体の方々が関わっていくということが非常に重要であるという思いである。地域の活性化やシビックプライドという点も、当然重要と考えるので、その点については、この計画にどのように盛り込めるのか考えていきたい。

〇計画案が総花的との御意見や宮城らしさと言う点について、いろいろ皆様からご意見をいただいている。もう少し形に見えるように最終案にまとめていきたい。

佐藤座長

〇宮城県には７つの圏域があるが、仙台圏域が少し良い意味で出しゃばってもいいのかなと思っており、今回、宮城東北のゲートウェイという点を打ち出させていただいた。その他にも個別具体のところも、あえて圏域ごとに PR し、特徴を出していくことが必要であると思っている。

石本委員

〇計画期間 3 カ年という限られた時間と財源、リソースという中で、どこの誰をターゲットにしていくか明確でないと感じた。国内も国外も含めて魅力を発信していくという大枠は重々わかっているが、その中でも、柱を決め、宮城県としてどこをメインにターゲットを置くのかということが大事である。それにより、より細かい施策などの戦略等々のブラッシュアップができるのではないか。

〇目先を言えば、やはりインバウンドが大事である。一方で、爆発的に来訪者が増加するものの、自分たちの力ではどうしようもできない世界情勢等の影響で来訪者の増減が大きいところも問題。徐々に増え安定的にインバンドが来てくれるようになるといいと思うので、プランはそのような点も意識した方がいい。

事務局（松本担当課長）

〇ターゲットを明確にして、それを踏まえて、政策をどう構築していくかといくことは、非常に大事な視点である。来年度以降、ターゲットをしっかりと絞りプロモーションしなければいけないと考えている。

佐藤委員

〇プラン中間案は、他の委員と同様にターゲットが広すぎてわかりづらいと思った。もちろんインバウンドをターゲットとすることも必要だが、まだまだ日本国内で宮城に来ていない関西圏や西日本の方々がおり、宮城で何を見てもらうのかをきちんと打ち出されれば、可能性があるだろう。

〇インバウンドに関して、仙台空港からの中華圏の方々をターゲットというのはもちろ

んわかるが、ゴールデンルート観光後の 2 回目、3 回目の来訪に東北に来てもらえる政策というのもいいのではないか。遠くの方々と県が連携することもあると思うので、その点もこの計画にきちんと入れておいた方がいいのではないか。

〇施策にメリハリ、強弱の必要性があると思う。３年間という期間や予算も限られている中で心配である。

〇宿泊税を導入した他の地域を見ると、導入後２、３年は少し宿泊者が減る傾向にあるということを我々も調べて聞いている。そういった部分で、以前行った県民割などをやって、他の県への宿泊を極力減らしていく政策も考えるべきだと思う。

事務局（松本担当課長）

〇ターゲットの設定は、プラン最終案ではより明確になるようにしたい。また、施策のメリハリという点については、社会情勢により変更する部分はあるとは思うが、このような圏域の会議の場なども通じて、しっかり管理していきたい。

～議事２について事務局（仙台地方振興事務所　吹谷部長）より説明～

磯田委員

〇宿泊税については反対の立場でやってきたが、可決となってしまったのでやらざるを得ない。人手不足対策は急務である。宿泊税徴収という手間も出てくる。フロント業務の従事者へ徴収時の対処法などのケアが必要。全国に幅広く周知をしていただき、その対策等もどんどん詰めていっていただきたい。

〇宿泊事業者部会について、もっと早く設置してほしかった。無いよりはあった方がいいが、もう決まった後に設置されてもという思いはある。

〇DX 化について、宿泊税の件もあって各旅館等はシステム構築をしてく必要があり、補助もあると思うが、導入施設の規模等も様々であるので、補助金の条件はなるべく柔軟に対応していただきたい。

事務局（松本担当課長）

〇人手不足への対応について、観光産業の人手不足は喫緊の課題。第６期プラン中間案の中では人手不足対策を盛り込み、特に宿泊業の稼働率向上を目指す。

〇宿泊者数の数値目標と受け入れ体制については、第 6 期プランより仙台圏域の数値目標を設定するが、受け入れ側の体制が整っていなければ目標達成が難しいため、体制強化に注力していく。

〇宿泊税の導入準備については、宿泊税の徴収が始まる来年に向け、フロントでの負担軽減策を検討する。スムーズな徴収を目指し、24 時間対応のカスタマーセンターの設置も計画している。

〇事業者の負担軽減策として、システム構築の補助を検討している。また、年内に説明会を開催し、事業者の意見を取り入れていく予定である。

布田委員

〇数値目標の設定方針について、令和５年度の宮城県の宿泊施設稼働状況は 58.3%で、今後も宿泊者増加の余地ありということだが、実際のところ、当市では、従業員の数が少なく定休日を設けていたり、老舗ホテルが廃業を見込んでいたりという話も聞いているので、この数値目標が順調に伸びていけばよいが、仙台圏域でどうなのかなということを一点不安に思う。

〇意外と県民であっても、県北の方が県南を知らない、県南の方が県北を知らないとい

うように、なかなか足を伸ばす機会がないということも聞いている。従業員や稼働の課題もあるが、オフシーズンに関して、県民割など県内での宿泊需要の喚起につながるような政策も引き続き取り組んでいただきたい。

事務局（吹谷部長）

〇宿泊者数目標の設定については、仙台圏域が県の観光回復の牽引役を目指す一方で、各市町村の回復状況を考慮しつつ数値目標を決定したい。今後、市町村の意見照会を実施し、最終的な目標を固めることとしている。

〇人手不足と宿泊施設稼働率の課題については、今後もフル稼働は困難と予想されるため、DX 化などで効率を高め、稼働率を向上させる必要がある。

〇コロナ禍で広まったマイクロツーリズムを活用し、県外・国外からの観光客誘致に加え、県内観光促進を図る具体策として県民向けスタンプラリー等を継続し、仙台圏域への訪問を促進したい。

鈴木委員

〇宿泊ベースの目標設定をしたことは理解できるが、そのためにどのようなアプローチをしてくのかが見えない。日本人旅行客、インバウンドそれぞれにどのようなアプローチをしていくのか。

〇集客するにしてもその発信方法やターゲットが明確にされていないので、具体的な政策を書面等で出していただければありがたい。例えば、震災後は西日本から東北への来県振興のような通知が国より出ていた。

〇今、大阪から宮城へのキャリアの機体が小さいため、関西方面からの観光客が北海道に向かってしまうこともある。大手のキャリア事業者も交えて、東北への機体を大きくしてもらうようなアプローチも必要ではないか。

〇インバウンドに関して、東北は台湾一辺倒になりつつあるが、台湾の人口から見るともう飽和状態。団体旅行でなく個人になってくると羽田や成田に来るだろうが、その旅行者をどう引き寄せるか、台湾の次のターゲットはどこにするか、さらにその国の生活様式に対応した食事なども必要になってくるので、それらを含めた具体的な方向性を見せてほしい。

事務局（松本担当課長）

〇目標に向けた具体的な政策について行程表を示しながら、成果につなげたいと考えている。

〇戦略の連携については、戦略 1、2、3、4 は個別の施策ではなく、相互に結びついて効果を生み出すものとして設計している。今後、その連携をより示せるようにさらに検討したい。また、中間案後に実施計画を作成し、各年度の具体的な政策を提示する予定であるが、方向性についても、どのような形で示せるかを考えたい。

〇インバウンド戦略の拡大については、台湾に依存せず、欧米市場へのアプローチも含めたインバウンド施策を深掘りし、具体策を盛り込む計画である。

半田委員

〇仙台圏域の施策の方向性について、③持続可能な観光地づくりに向けてとある。亘理町もキラーコンテンツである“はらこ飯”の時期であるが、原材料の鮭は地元で獲れなくなってきており、原料価格の高騰や人件費の影響で営業が厳しくなってきている。宿泊も大事であるが、飲食店を守るというのも、一つ大事な視点ではないだろうか。郷土料理を大事にしている地元の業者、飲食店もあり、そういう人たちを守る施策も何か作らなくてはいけないのではないかと思っている。

○人材不足対策が急務なことについて、マッチング支援等の実施により、ホテルや飲食店にどのくらいの人材が結びつくのかという成果も見えるようにしてほしい。新しい人材の確保は急務と思っているので、そのあたりの見える化を実現してほしいと考えている。

東海林委員

○デジタルスタンプラリーの開催やガイドブック仙台版の作成など、色々準備していただいて大変ありがたいと思っている。スタンプラリーでは、どこに何人行ったかなどの評価方法がどのようになっているのか教えてもらいたい。「ＷＯＷ！な旅」を毎年観光案内所に置かせてもらっているが、他のパンプレットと内容がかぶるところもあり、あまり持っていかれていない様子なので、その費用対効果や評価方法について教えていただきたい。

事務局（吹谷部長）

○スタンプラリーの数値化と活用について、スタンプラリーの利用者データを数値化し、飲食店や直売所への集客状況を把握している。自治体や参加店舗へこれらデータを共有し、次の施策に活用出来るという点がデジタルの強みである。

○印刷物も飽和状態の中で、ガイドブック「仙台 WOW！な旅」については、今年度から試験的に SNS 上でガイドブックの周遊プランを SNS 上で発信し、紙媒体に加えデジタルでの閲覧を促進している。また、翻訳機能を活用し、外国人旅行者向けの情報発信も強化している。

～意見まとめ～

林委員

○みやぎ観光戦略プランについて、基本理念「オールラウンドな観光地の実現」ということで、よく“何でもあるは何もないに等しい”と言われるが、それに近いものがある。本来、東北の中での宮城の役割があるはずで、その中で宮城県の強みと弱みというのも当然あって、伸ばすべきところとあるいは補うところというのを明確にしていく必要があるのではないか。

○その点では、仙台圏域の施策の方向性にあるキャッチフレーズのように、東北・宮城のゲートウェイ機能を活かした周遊性に優れた観光地づくりという、いわゆる仙台圏域が全体をリードしますよというフレーズは非常によい。

○例えば、東北を宮城がリードするんだというキャッチフレーズを作り、しっかりやりますよという意思表示をしてもらった方がよく、ただやることを網羅するだけでは、資料として訴える力がない。

○仙台圏域の施策の中で、目標の設定について、7 百数十万人から令和 9 年は 850 万人という目標値が書いてあるが、これは予想値である。色々な施策をやりながらここを目指すというのが目標であって、施策を打って目標を達成する意気込みが見えない。1,000 万人泊を目指すぐらいの勢いでやるべきと思う。

○そのために何をするかは、例えばインバウンド。東北に来ているのは 1%程度で伸びしろがある。円安もしばらく続き、海外での日本の人気はまだ続くので、他のエリアは人で溢れかえり、まさに東北は空いている。東京の宿泊費は非常に高いこともあり、間違いなく遠方にも来ると思う。そういった背景を考えると、1,000 万人泊を達成するという強い意思表示が必要ではないか。

○人手不足はどの業界も深刻であるが、宮城は東北の中でも恵まれており、東北をリードしないと。自治体はプランを策定するが、実施するのは民間事業者の方々である。自

治体にばかり頼らずに自分たちが動くことも必要であり、アイデアを我々から具体的にぶつけていくことが大切なのではと感じる。

〇宿泊税もしっかり宿泊者を増やすために使ってもらいたいので、宿泊部会では制度設計だけでなく、お金の使い道についても要望していきたい。

佐藤座長

〇基本理念にある東北地方のゲートウェイ機能を活かし、宮城県が率先して東北全体への誘客を促進するという視点は重要だ。その中でも、仙台圏域を「東北、宮城のゲートウェイ機能を生かした観光地」として明確に位置づけ、広域観光の拠点になるよう取り組んでいくことが必要であろう。

〇インバウンド誘致拡大について、インバウンド観光客の多くが西日本へ行ってしまう現状を変え、東北への誘客を 10～20%規模に拡大する目標を持つことも大事ではないか。

〇東北の観光地の魅力向上やプロモーションの強化が必要であり、総花的な計画にならないような工夫が求められる。